

講 演

ノヴゴロド白樺木皮簡の用字法について

佐藤 純一

1951年考古学者アルツィホフスキーの組織したノヴゴロドの中世都市遺構の発掘調査の過程で白樺木皮簡⁽¹⁾10点がはじめての発見され、未知の新史料として注目を集めて以来35年が過ぎ、その後続々と発見された白樺木皮簡の総数はすでに600点を超えた模様である〔4〕。アルツィホフスキーとその協力者の名で写真ないし写生図とともに詳細な発掘データ、語句の注釈、現代語訳をそえて印刷公刊された白樺木皮簡は1976年度発掘分までの539点に達し、専門家の研究に十分な資料を提供している〔6, 7, 8, 9, 10, 11, 12〕。(補注参照)

これらの木皮簡は白樺の樹皮の内面あるいは両面に尖端の鋭い骨または金属製の鉄筆状の用具で掻き傷ないし圧迫痕のかたちで文字を記したもの⁽²⁾で、11世紀から15世紀にわたり、その内容は私信やメモ、売買・貸借の証書類、荘園経営に関する指示や報告、落書きや手習いの反故などを含み、羊皮紙文書に比べて私的かつ日常的性格の短いものが多い。⁽³⁾

同様の白樺木皮簡はその後スモレンスク、プスコフ、ヴィテプスク、スタラヤ・ルサ、トルジョクなどの諸都市でも発見された〔4, 14〕が、スタラヤ・ルサでの発見例13点はアルツィホフスキーらの最後の刊行分〔12〕にあわせて印刷公刊されている。

ノヴゴロドの白樺木皮簡の発見以前にも白樺の樹皮に記された文字資料は存在はいくつか知られており、その中にはサラトフ近郊で発見された14世紀の金帳汗国期の文書や18世紀初めにシベリアで貢物の記帳に用いられた白樺樹皮製の帳面の例などがある⁽⁴⁾が、いずれも高価な羊皮紙や紙が使えない僻地や貧しい生活の中でのごく稀な事例とされ、中世のノヴゴロドのような大都市における白樺木皮簡の大規模かつ日常的な使用は全く予想外の事実であった。

ノヴゴロドにおける発掘調査の全体とその経過、中世の道路の舗装に用いられた丸太の年輪年代学的測定にもとづく各層位の絶対年代の決定や、主要な白樺木皮簡の内容とそれに関する中世ノヴゴロドの史的背景などについてはヤーニン的一般向けの著書〔16〕によって知ることができる。また、ロシア中世史資料としてのノヴゴロド白樺木皮簡の学問的な分析記述はチェレプニンの著作〔15〕に詳しい。日本においてはすでに松木の正確周到な紹介〔3, 4〕があるが、白樺木皮簡の言語学的研究の側面について本稿が従来の欠を幾分でも補なうことができれば幸いである。

I

はじめに、これまでのノヴゴロド白樺木皮簡の言語学的研究の主要なものをあげる。

最初の2年間の発掘分(1951-1952)については各分野の専門家の分担執筆⁽⁵⁾による「ノヴゴ

ロド白樺木皮簡の古文字学および言語学的分析」〔13〕があるが、1953-1957年度の発掘分についてはアルツィホフスキの3冊の報告書〔8, 9, 10〕にボルコフスキが独立の論文を添えるかたちで詳細な研究が示されている。⁽⁶⁾ この時期までにすでに300点を超える白樺木皮簡が検討の対象とされ、その言語の特徴を示す基本的事実はほぼ完全に把握されているが、ジュコフスカヤの著書〔1〕は初期の研究の総括展望としてすぐれたものである。

個々の木皮簡のテキストの解釈の矛盾や欠陥の指摘を続けてきたメシチュルスキは1969年の論文〔5〕において、ノヴゴロド白樺木皮簡の言語が民間の書簡文として洗練完成された文体的側面を有することを主張する⁽⁷⁾一方、11-12世紀の木皮簡の言語に第二次口蓋化の痕跡が認められないものとする見解をはじめて定式化した。

ノヴゴロド白樺木皮簡の最初の発見以来30年余りを経て発表されたザリズニャクの論文〔2〕はこの分野で最新かつ最大の労作で、上述の先行する諸研究の成果や主張を総合して新しい研究の視点を提出したものと評価できるので、その主要点を以下に紹介する。

II

ザリズニャクの論文は「白樺木皮簡に用いられた用字法体系」(§2-§19)、「語彙と史的音声学」(§20-§43)、「古ノヴゴロド方言の形態論的特殊性」(§44-§58)の3部より成り、ザリズニャク自身は自分の研究が一般的な問題の解決を意図するものではなく、個々の白樺木皮簡の研究の精密化をめざすものにすぎぬことを強調している(§1)が、その結論はきわめて多岐にわたる具体的なものである一方、ノヴゴロド白樺木皮簡の言語の性格の定義という一般的な問題に深く関わってくるのは当然である。その結論の要点はつぎのとおりである。

1. 白樺木皮簡は同時代の羊皮紙文書の多くに見られる標準的文語の用字法と異なる独自の用字法体系によっており、木皮簡の多くはその範囲内で極めて正確な表記を実現している。木皮簡を標準語の規範から免脱した無教養な地方住民の所産とするのは誤りである。
2. 白樺木皮簡の用字法の中心の特徴は、任意の ѡ を о と書くこと(ѡ → о), ѡ と е を相互に交換可能な文字とすること(ѡ = е), および /e/ と /ě/ の書きわけをしないことなどである。
3. 11-12世紀の白樺木皮簡の表記は第二次口蓋化と全く無関係で、13世紀以降にはじめてこれを示す少数例が見出される。たとえば、標準的な **цѣль** に対応する **кѣле** (№ 247), 標準的な **сѣрь** 「灰色ラシヤ地」に対応する **хѣрь** (№ 130), 標準的な **звѣзда** に対する **гвѣзда** (ст. рус. № 8), 標準的な **вѣси**, **вѣсьмь** に対応する **вохи** (№ 497), **вѣхемо** (№ 87) など。この点で古ノヴゴロド方言はポーランド語、カシューブ語、スロヴァキア語、スロヴェニア語などと共通する。
4. 白樺木皮簡の多くに共通する形態論上の主要な特異性は次のとおりである。

- i) -o 語幹名詞の単数主格および形容詞の男性単数主格形と -л 分詞の男性単数形に語尾 -e が用いられること(標準的な形では -ъ): **хлебе** (№ 424), **Онтане** (№ 169), **дешеве** (№ 424), **послале** (№ 169) など。
- ii) -a 語幹名詞の単数生格・複数主格一対格および形容詞の女性単生・複主一対と -л 分詞の女性複主の語尾が -ъ となること(標準的な形では -ы): **бес коунъ** (№ 526), **три гривнъ** (№ 73), **а двъри кълнъ** (№ 247, 女複主〔上述3参照〕), **на гвѣздкъ великъъ** (ст. рус. № 8, 長語尾女複対〔上述3参照〕), **понималъ** (№ 140) など。
- iii) -ja 語幹名詞の単数与格一所格および -jo 語幹名詞の単数所格に語尾 -ъ を用いること(標準的な形では -и): **к Марьъ** (№ 53), **на конъ** (№ 78) など。
- iv) 動詞直説法現在 3 人称単数および複数はともに末尾の -тъ を欠くこと: **а ти боуде война** (№ 527), **чоломъ бью** (=бьют) **хрѣстьянъ** (№ 307) など。
5. 特殊な統語論的特徴としては接続詞 **дать** (=чтобы) と直説法現在による従属節が用いられる: **моливи дворанину Павлу дать грамотъ не дасть**
(№ 5) 「証文を渡さぬようパーヴェル殿様に言上せよ」など。
6. 11-13世紀の白樺木皮簡のほうがより新しいもの(13世紀中葉以後)よりも方言的偏りを著しく示している。
7. 白樺木皮簡に見るかぎり古ノヴゴロド方言は音韻・形態論・統語論および語彙の上で西スラヴ諸語(とくに北部リャフ方言)およびスロヴェニア語と多くの共通点があり, 東スラヴ語の他の諸方言とは異なる特徴を示している。
- 上に要約した結論の諸項目はその大部分がザリズニャク以前にいろいろな研究者によってすでに指摘・主張されたことがあったが, サリズニャクの功績はその全体を総合すると同時に個々の問題点についてより徹底的に解明・確認し, 多くの木皮簡について新しい統一的な解釈を示したことにあると思う。彼の研究の出発点は全木皮簡のテキストの精密な調査分類にもとづき, それらに特有の用字法体系を抽出設定することにあつたが, 以下ではこの点についてより具体的に述べることにする。

III

木皮簡 № 460 (第 1 図) は 12 世紀のもので, いまのところ最も古くかつ完全なアルファベットの例とされているが, その構成は 34 文字に過ぎず, s と з, н と і と v, o と ω, ou と ѳ のような二重三重の余剰を含む一方で, ы と ъ を欠いている。⁽⁸⁾ 筆跡の未熟さから, まだ習いはじめの書き手の記憶不十分による脱落と解する余地もない訳ではないが, 現実に ъ や ы やその他の文字を欠く木皮簡の実例が多数見出されるので, これをある時期のある時期の人々によって用いられ

た実際的な文字体系の1例と考えることは十分可能と思われる。

使用された文字の種類が極端に少い木皮簡の例としては14世紀後半の№497(第2図)があげられるが、ここではѢ, Ъ, Ы, Ѹ, Ꙗ, ꙗ が完全に除外されている。しかもこの木皮簡が示す用字法が必ずしも表音的でないことは, к, вのような前置詞をあらゆる場合を通じて ко, воとしたり, 語末の子音字のあとに必ず -оを添えて поколоно, городо, бого, вамо, ѡсотавимоのように書いてあることから明らかである(これらは標準的な поклонъ, городъ, богъ, вамъ, отставимъに対応する)。また, поколоно, Г^оригори, сестори, солова, ѡсотавимо などのように子音間に -о- を挿入して, 一見いわゆる第2次母音重複(второе полногласие)ないしは韻律的読法(скандирование < *L. scansio*)を思わせるような書き方も, 恐らく発音とは結びつかない, 文字面だけの現象と考えられる。

こうした発音に関りのない, いろいろな用字上の規則が当時の読み書き教育によって, 子供たちに与えられていたらしいことは, 13世紀前半のОнфим少年の入念な習字のあとを残す木皮簡№199の裏面(第3図)の落書き中の Поклоно ꙗ Онѳима ко Данилъ という書き方からも容易に推測できる。

ノヴゴロドの白樺木皮簡を残した人々の間に様々な用字法体系が生じたのは, 文字という複雑な機能を持つ記号の性質そのものが原因であるということが出来る。

すなわち, 一般に表音的な文字体系は当初は音韻的対立に対応するように文字の区別や用字法が決められるが, やがて音韻体系が変化して文字と音声の対応が失われ, 文字面での混同や混乱が生まれる。さらに一定の時間を経てその混同・混乱が最大限に達し実用上の不便が著しくなると, 新しい音韻体系を反映するより合理的な文字体系や用字法に移行すると考えられる。ただし, 中世においては標準的な用字法体系を維持するための社会的権威や政治権力は近代国家の場合ほど発達していないので, 現代の諸言語の正書法のような強い拘束力を持たない個々の用字法は一般に不安定で, 時代や場所, 集団によって様々な変種がごく狭い範囲内で生じ得たはずである。その際, 教会関係の書物や文書と公的な記録などは標準的な言語と用字法の伝統を守ろうとする傾向が強かったが, 日常的・私的な必要をみだす書き付け類の場合はそれと異なる様々な用字法が生じ, 一見奇妙で不合理なものも地方的な流儀として長く保たれた例があったと考えられる。

中世の東スラヴ人たちの間に文字の使用が導入されたのはキエフ・ルーシがキリスト教を公式に受け入れた988年以後のことと考えられてきたが, これまで発見された最古の白樺木皮簡は№246と№247の2例で, とともに11世紀前半の可能性を示す層位から出土している。木皮簡は一般人の日常的な文字使用を裏づけるものであるから, このことはノヴゴロドではこの時期にすでに文字の使用が一般化していた可能性を示すとともに, 現存の東スラヴの最古の羊皮紙文書である「オストロミール福音書」(1056-1057)より古く, しかも確実に当時のノヴゴロドの言語によ

って書かれた資料を我々に与えている可能性も示しているのである。

それはともかく、東スラヴ人が文字の使用を始めてのちに生じた最大の音韻変化は **Ѣ** と **Ѥ** が母音体系から失われたことで、これに関係する音韻体系の変化は羊皮紙文書の文字面にも根本的な変化をもたらした。すなわち母音としての **Ѣ** と **Ѥ** は「弱い位置」で消失脱落する一方、「強い位置」では **o** および **e** に交替した⁽⁹⁾ が、音声面の支えを失った両字母は記号字母としての道を歩みはじめるとともに、開音節の原則が消滅した結果、新しい子音連続の出現や位置による子音の同化が生じたため、それらを反映した文字面の動揺は極めて激しいものとならざるを得なかったからである。羊皮紙文書や金石文から判断する限り、この **Ѣ** と **Ѥ** に関わる音韻体系の変化は12世紀中頃までに進行がはじまり、13世紀中に完了したものと考えられて来た。

ザリズニャクはこの **Ѣ** と **Ѥ** の推移の反映を白樺木皮簡でも確かめるための調査を行なったが、音声とは無関係に **Ѣ** のかわりに **o**、**Ѥ** のかわりに **e** を用いる用字法の存在を仮定するならば、上述の「強い位置」における **Ѣ**、**Ѥ** と **o**、**e** の交替ないし混同は一切音韻変化の情報としては価値を失ってしまうことに気付かざるを得なかった。さらに「弱い位置」でも **Ѣ**、**Ѥ** を機械的に **o**、**e** に移すことがあり得るので、結局音韻変化の証拠として使えるのは子音間の本来的な弱い **Ѣ**、**Ѥ** (***сѢс**、***сѤс**) と本来的な子音連続 (***сс**) の間の区別の有無だけであることに着目して、これによって11世紀-13世紀の白樺木皮簡を詳しく調べ、断定可能な43点の特徴を整理して次のような結論に達した。

1. 12世紀前半までの14点のうち10点はこの混同を全く示さず、全体として問題の音韻変化の進行がそれほど顕在化していなかったことが推定できるが、11世紀の №526 および12世紀初の №336 にそれぞれ7分の1ないし6分の1程度の確率で混同が生じており、また、12世紀初の2点(№84, №335) は混同の有無が1 : 0、 および1 : 1 のように事例が少ないので断定が難しいとしている。
2. 12世紀中葉からはこの混同の優勢な木皮簡が現れはじめるが、12世紀と13世紀の境界期まで混同のない木皮簡も認められる。ただし、その比率は混同のないものおよび混同が7分の2程度以下のものの合計8点に対し、混同の圧倒的に優勢なものおよび混同の有無が1 : 4程度以上のものの合計が15点となっている。
3. 13世紀前半期以降ではもはやこの混同の圧倒的に優勢な木皮簡のみが現れる。
4. 従って古ノヴゴロド方言においては、「弱い位置」の **Ѣ**、**Ѥ** の消失脱落は基本的には12世紀に進行し、13世紀初には完了したものと考えられる。

上述のザリズニャクの結論が示すところによれば、白樺木皮簡の示す限りでは **Ѣ**、**Ѥ** の推移の進行の開始と完了は従来の羊皮紙文書による推定よりも半世紀ぐらいつつ早かったと考えることができ、また、キエフを中心とする南西地域と比べてノヴゴロドにおけるこの推移がとくに遅かったとする根拠はないとする見解が示されている〔2 (§5)〕。なお、この基準により「弱い位

置の**Ѣ**, **Ѥ**」の混同が全面的に認められる木皮簡の用字法は後期古ロシア語のノルマを示すものと考え、その具体的な内容の検討に移るが、ただし、逆は真ならずで、この混同を含まないものをすべて前期古ロシア語のテキストとすることはできない。書き手が聖職者などのように伝統的な標準的用字法をマスターしている場合は後期のテキストでも混同を含まない可能性があるからである。

IV

任意の木皮簡に認められる用字法と標準的な羊皮紙文書の用字法とのずれを記述する方式はつぎのとおりとする。

1. 標準的用字 a_1 が木皮簡では a_2 となる時は $a_1 \rightarrow a_2$ のように示す。ただし、その交替が時々の場合には $a_1 \rightarrow a_1/a_2$ ないし $a_1 \rightarrow a_2/a_1$ のように頻度の高いほうを先にして二様の表示をする。
2. 標準的用字法における a_1 と a_2 の区別を木皮簡がまったく行わずに、 a_1 と a_2 を自由に入れ替えて用いているときは $a_1 = a_2$ ないし $a_2 = a_1$ のように示す。

ノヴゴロド白樺木皮簡に特徴的な用字法は **Ѣ**, **Ѥ** と **о**, **е** の文字上の取り扱いの問題で、**Ѣ** - **о**, **Ѥ** - **е** のペアの間につきのような関係が見られる。

1. **Ѣ** - **о** のペアでは **Ѣ** \rightarrow **о**, **Ѣ** = **о**, および **Ѣ** \rightarrow **о/Ѣ**。ただし **о** \rightarrow **Ѣ** は殆ど見出だされない。
2. **Ѥ** - **е** のペアでは **Ѥ** = **е**, **е** \rightarrow **Ѥ**, および **Ѥ** \rightarrow **е**。

ザリズニャクは11世紀から15世紀にわたる木皮簡の大・中テキストのすべてと若干の小テキストの合計約200点⁽¹⁰⁾について上記の用字法の有無とそのタイプについて時代順に分類・整理した結果を示しているが、それによれば白樺木皮簡の **Ѣ** - **о**, **Ѥ** - **е** のペアの間に見られる特異な用字法は12世紀前半から現れはじめるが、その通時的経過には3つの明瞭な時期とそれぞれの中間移行期2つを認めることができるという。

1. 前期(11世紀-12世紀初)は上述のペアの間に混同がなく、標準的用字法がそのまま行われているテキストのみである(ごく稀な混同例を含めて15点)
 - a) 第1移行期(12世紀前半-12世紀後半)には **Ѣ** - **о**, **Ѥ** - **е** の体系的混同がはじまるが、テキストによる混同の比率は約半々で、混同のない(またはごく少い)テキストは13点、各種の特異な用字法によるものの合計も14点程度である。そのうちの最も多いタイプは **Ѣ** = **о** で6点、ついで **Ѣ** \rightarrow **о** が5点である。⁽¹¹⁾
2. 中期(12世紀末-13・14世紀境界)は問題のペアの混同の最優勢期で、混同の全くない唯一の例 №293 は司祭の手になるものであり、混同のごく少いものも2点に過ぎないが、各種の混同を体系的に示す木皮簡は50以上に及んでいる。したがって個々のタイプの用字法はむしろ

この時期のノルマと考えることができるが、最も多いのは $\mathfrak{b} \rightarrow \circ$ の31点で、ついで $\mathfrak{b} = \circ$ の11点、 $\mathfrak{b} \rightarrow \circ / \mathfrak{b}$ は9点といった分布である。

b) 第2移行期(14世紀)には混同のないテキストが増加するが、混同を含むもののほうが遙かに優勢で、その比率は前者21点に対し後者37点である。

3. 後期(14・15世紀境界-15世紀)には混同を含まないテキストの優位が再び訪れ、体系的な混同を示すテキストは著しく減少する。その比率は前者が37点に対し、後者が10点となっている。

以上のような $\mathfrak{b} - \circ$ 、 $\mathfrak{b} - e$ の混同を特徴とする用字法の通時的ひろがりについては、すでにジュコフスカヤ〔1〕の指摘があったが、ザリズニャクの研究によってこの用字法の最初の例がすでに12世紀初頭にあり、その終結もずっと遅く14・15世紀の境界頃であることが明らかにされた。その結果 \mathfrak{b} 、 \mathfrak{b} の推移の進行と完了よりもずっと長期にわたって \mathfrak{b} 、 \mathfrak{b} と \circ 、 e の区別をしない様々な用字法がノヴゴロド白樺木皮簡に用いられていた事実がはじめて明らかになった。

白樺木皮簡の用字法にはさらに後で述べるようないろいろな約束があり、かえって標準的な書物の用字法より書きかたが難しい面さえある。たとえば конь はほかに коне 、 кънь 、 къне などとも書かれるわけで、発音と関係ない文字面だけの約束なので、書き手にも読み手にも相当の練習が必要なはずである。

ザリズニャクの指摘するように木皮簡 №531 の書き手の Анна という女性は12・13世紀の境目ごろに約150語よりなる長大なこの書簡を書くにあたり $\mathfrak{b} \rightarrow \circ$ の用字法を徹底的に守り、標準用字の \mathfrak{b} をすべて \circ で書く作業を47回も行って、 \mathfrak{b} をそのまま残すようなミスも1度も犯していないのである。従ってこの用字法を決して書き手が無学であった結果とすることはできないのである。

V

字母 \mathfrak{z} についても同様の調査が行われ、木皮簡の用字法としては三つの時期の区別があることが明らかになった。

1. 前期(11世紀-12世紀後半)は $\mathfrak{z} - E^{(12)}$ のペアに最古の木皮簡を含めて混同の例が17点あるが、 \mathfrak{z} に関する混同を含まないものが優勢を占めている(28点)。
2. 中期(12世紀末-13・14世紀境界期)は $\mathfrak{z} - E$ の混同が優勢である(39点)と同時に、 $\mathfrak{z} - \mathfrak{h}$ の混同が始まり(8点)、 \mathfrak{z} の混同を含まない木皮簡はごく少数(8点)に過ぎない。
3. 後期(14世紀前半-15世紀)にはほぼ半数の43点が $\mathfrak{z} - \mathfrak{h}$ のペアの混同を示すが、 \mathfrak{z} の混同を含まないものも39点と増加している。一方 $\mathfrak{z} - E$ の混同を示すものは減少し(17点)、とくに $\mathfrak{z} \rightarrow E$ のタイプものは14世紀末から現れなくなる。

ザリズニャクの解釈はつぎのとおりである。すなわち、古ノヴゴロド方言では当初は $/\check{e}/$ は

/e/ と区別を保ち、大部分の場合は **ѣ** と **e** は混同されなかったが、すでに最古の木皮簡 (№ 246) を含め /ě/ を文字 **e** で書く用字法が少数例存在した。12世紀末から **ѣ** → **E** または **ѣ** → **E/ѣ** の用字法が支配的となるが、13世紀から認められる **ѣ** - **и** の混同は軟子音のまえおよび語末では /ě/ が [i] に近くなった事実を示すものかも知れない。すなわち、これは純粹に文字面の約束ではなく、音声的な影響の可能性がある。/ě/ と /e/ の書きわけをしない用字法は14世紀末からは衰退するが、これは **ѣ** と **o**、**ѣ** と **e** の書きわけをしない用字法の衰退と同様で、この時期以降ノヴゴロド共和国の政治的社会的意義が低下し汎ロシア的とくにモスクワ的影響が強まり、標準的な用字体系が在来の生活的用字体系にとって変わったことを示している。

VI

これまで述べた白樺木皮簡の用字法の中心的特徴のほかに、より重要性の少ない、しかし興味深い特徴がいくつか示されている。

1. **ц** - **ч** の混同は **ч** → **ц**、**ч** = **ц** がふつうのタイプであり、この混同を示さない木皮簡は少ない。
2. **ѣ** - **ѣ** の混同は古くから例があり、**ѣ** → **ѣ**、**ѣ** → **ѣ/ѣ** **ѣ** = **ѣ** などのタイプがあるが、13世紀 - 14世紀後半にこの混同はなく、単純な書き誤りに限られている。14世紀末から15世紀にかけて再び混同がはじまるが、語末に限られる。これは第二次南スラヴの影響の浸透をうかがわせる。
3. **ѣ** - **e** の混同は最古層ではすべて **ѣ** → **e** を示し、11世紀から13世紀まで **ѣ** はほとんど用いられなかった。ただし№ 199 が示すように13世紀前半の **Онфим** の手習の中には **ѣ** がある。13世紀後半からは **ѣ** のあるものが優勢となり、14・15世紀境界期以降は **ѣ** の使用がノルマとなった。
4. **ы** - **ѣ**、**ы** - **и** の混同:すでに述べたとおり№ 460 のアルファベットは **ы** を欠いているので **ы** なし用字法体系があり得た可能性は否定できないが、前者 (**ы** → **ѣ/ы**) は書き誤りの可能性がある一方、後者 (**ы** → **и/ы**) は14世紀 - 15世紀の木皮簡に多い。

以上がノヴゴロド白樺木皮簡の用字法に関するザリズニャクの研究と言及の概要であるが、彼は個々の木皮簡に独特の用字法体系の存在を認めることによって、より合理的な解釈を引き出し、難読箇所や従来の恣意的な読み方の誤りを正すのに数多くの成功を収めた。最後にそうした成功の1例を紹介する。

木皮簡№ 142 (第4図) は従来から書き手の文盲ぶりを示すひどい書き方の典型とされて来たものであるが、ザリズニャクに従えば **ѣ** = **o**、**ѣ** = **e**、**ѣ** → **ѣ/E** などのタイプの用字法に従っており、その範囲内で極めて正しい表記を行なっている。書き誤りと思われるのはわずかに1カ所 (**передѣ** のかわりに **педѣ** としてある) に過ぎないことになる。また、とくに下線の部

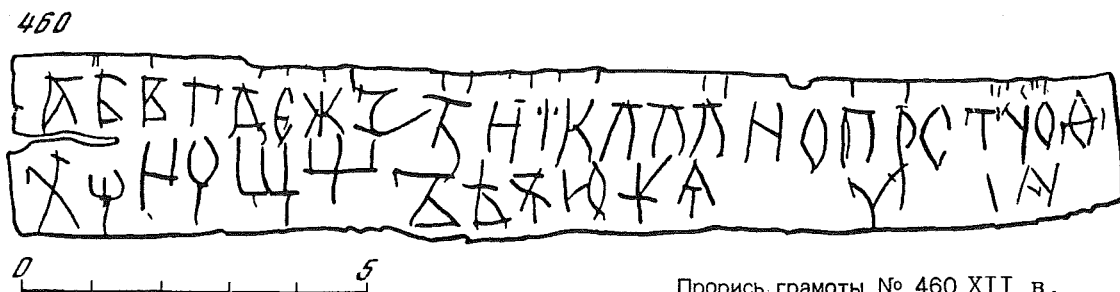
分では、アルツィホフスキイの解釈を訂正しているが、その根拠はつぎのとおりである。

下線の部分を標準的な用字で復原すれば、《 А что омешъ пришлють, и вы имъ конь мои голубыи дайте съ людьми, дать сохъ не кладеть; а не възьметь, и вы во стадо пустите пе[ре]дъ людьми. 》となる。ここで омешъ は омеша「犁頭」の複対（本稿第Ⅱ節4-ii参照）で、 сохъ もやはり соха「犁」の複対である。また、本稿の同じ場所（4-iv）で指摘した形態論的特徴により、はじめの пришлю は単1ではなく複3の пришлютьとして、その主語は手紙のはじめに言及されている Марк と Олекса を考えるのが適当である。そして дать を чтобы のような接続詞とし、直説法現在とともに用いる構文（第Ⅱ節5参照）とすることで文意は完全に把握されるのである。なお、 възме, людьми などに見る弱い位置の Ъ の脱落（すなわち *cc との混同）は、後期古ロシア語全体に共通する用字法のノルマを反映するものであるから、とくに誤りとするには値いしない。

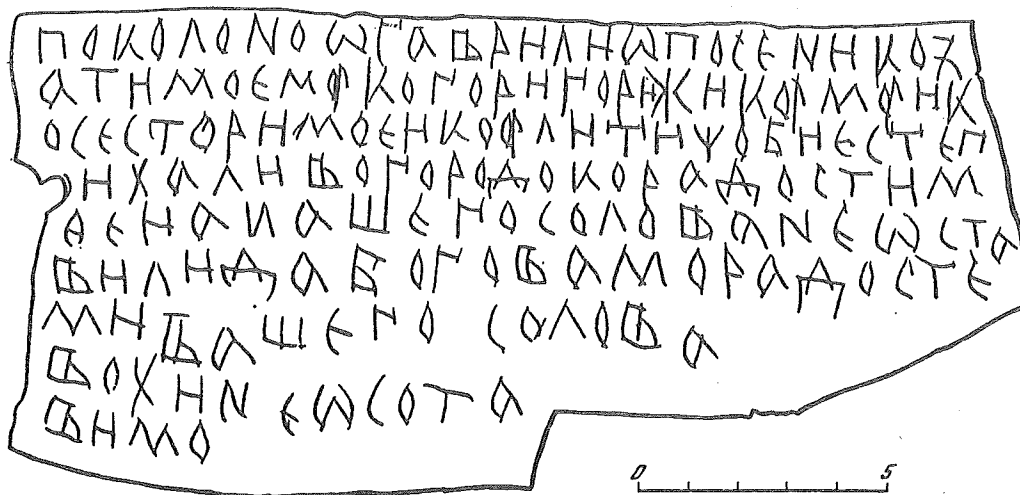
ザリズニャクの労作は白樺木皮簡の研究に新しい方法論的基盤をもたらすとともに、スラヴ語の史的音韻論の基本的諸テーゼにもとづく具体的な文字資料の研究・解釈の模範を示したものである。音声と文字の複雑な相関の実態を木皮簡の用字法体系の分析を通じて明らかにしたこの研究の一般的意義にも注目すべきであると思う。

本稿は1985年10月17日名古屋大学で開催された日本古代ロシア研究会の古代中世ロシア研究セミナーに於ける筆者の講演「ノヴゴロド白樺文書の言語の特徴について」の要約と補足である。

第1図 木皮簡 №460



497



Прорись грамоты № 497 (XIV в. 後半)

ПОКОЛОНО ѿ ГАВРИЛИ ѿ ПОСЕНИ КО З-
 АТИ МОЕМУ КО ГОРИГОРИ ЖИ КУМУ И К-
 О СЕСТОРИ МОЕИ КО УЛИТИ. ЧОБИ ЕСТЕ П-
 ОИХАЛИ ВО ГОРОДО КО РАДОСТИ М-
 ОЕИ, А НАШЕГО СОЛОВА НЕ ѿСТА-
 ВИЛИ. ДА БОГО ВАМО РАДОСТЕ
 МИ ВАШЕГО СОЛОВА
 ВОХИ НЕ ѿСОТА-
 ВИМО.

(アルツィホフスキイ訳)

Поклон от Гаврилы от Постни к зятю моему к Григорию и
 куму и к сестре моей к Улите. Хоть бы вы поехали в город,
 на радость мою! А нашего приглашения не отставили бы. Дай
 бог вам радостей. Мы вашего приглашения все не отставим.



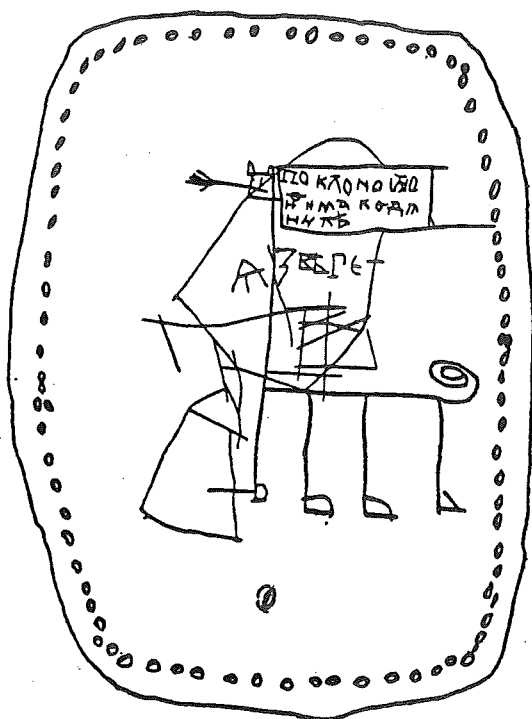
0 1 2 3 4 5 см

Прорись грамоты № 199, внутренняя сторона донца твеса

№ 199

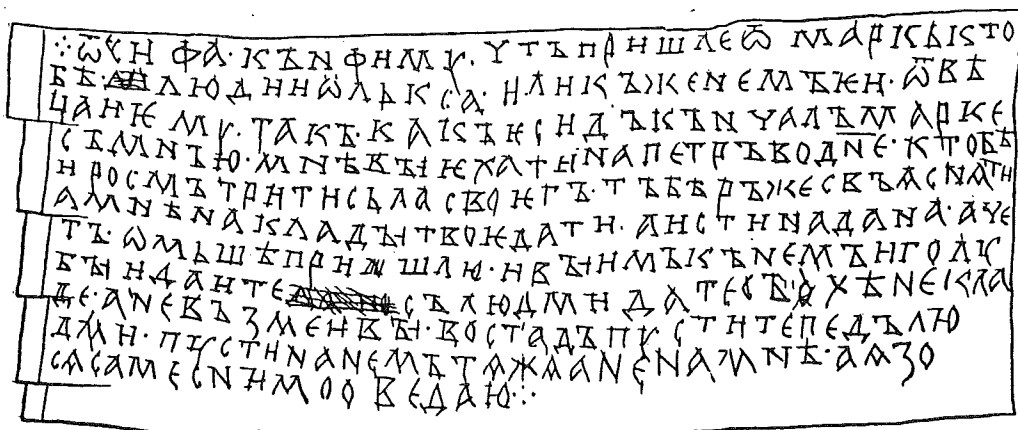
ПОКЛОНО Ю О-
НѠИМА КО ДА-
НИЛЪ

А ЗВЪРЕ.



0 1 2 3 4 5 см

Прорись грамоты № 199, внешняя сторона донца твеса (XIII в.)



0 1 2 3 4 5

Прорись грамоты № 142 (XIII/XIV в.)

Ω Есифа к Ёнфиму. Чтъ пришло Ω Маркъ к тобѣ людии ωлькса, или къ жене мѣки, Ωвѣцаи кму такъ: какъ кси дѣкънчаль Марке съ мнѣю, мнѣ выхати на Петрьво дъне к тобѣ и росмѣтрити съла свокгъ, тѣбѣ рже свѣа снати, а мнѣ наклады твою дати, а истина дана. А четъ ωмшьѣ пришло, и вы имѣ кѣне мѣи голубии дайте, съ людми дате, съохѣ не кладе. А не възме, и вы во стадѣ пустите педѣ людми. Пусти на немѣ тажа, а не на мнѣ. А азо са саме с нимо ѡведаю.

Перевести грамоту можно так:

«От Есифа к Онфиму. Если пришлет от Марка к тебе людей Олекса или к жене моей, отвечай ему так: как ты, Марк, договорился со мною, я выеду к тебе на Петров день (29 июня) и осмотрю свое село, а ты снимешь свою рожь, а я отдам тебе проценты, а основной капитал отдан. А если я пришлю сошники, тогда вы им дайте моих голубых коней, с людьми дайте, не запрягая в сохи. А если он не возьмет, пустите их в стадо перед людьми. Пусть он начинает тяжбу, а не я. А я сам с ним сговорюсь».

Зализняк 訳

А если пришлют (Марк и Олекса) лемеха, то вы им дайте моего голубого коня при людях, с тем чтобы он (Марк) не накладывал на него сохи; а если он не возьмет, то вы пустите коня в стадо при людях...

参 考 文 献

1. Л.П.Жуковская, Новгородские берестяные грамоты, 128 стр.
М., 1959
2. А.А.Зализняк, Наблюдения над берестяными грамотами. в сб.
《История русского языка в древнейший период. Вопросы
русского языкознания, вып. V》 Изд-ство МГУ, М., 1984, стр.36-153
3. 松木栄三, 『ノヴゴロド白樺文書について』, 宇都宮大学教養部研究報告№12, 第1部,
1979, 1-34頁
4. 松木栄三, 『白樺の手紙—ロシア中世都市民の生活から—』, 窓№53, ナウカ株式会社, 東
京, 1985, 2-6頁
5. Н.А.Мещерский, К филологической интерпретации новгородских
берестяных грамот, 《Ученые записки Ленинградского педагогического
института》, т.366, Л., 1969, стр.85-93
6. Новгородские грамоты на бересте (из раскопок 1951г.) [А.В.
Арциховский и М.Н.Тихомиров], 67 стр., М., 1953 (грамоты 1-10)
7. Новгородские грамоты на бересте (из раскопок 1952г.)
[А.В.Арциховский], 91 стр., М., 1954 (грамоты 11-83)
8. Новгородские грамоты на бересте (из раскопок 1953-1954гг.) [А.В.
Арциховский и В.И.Борковский], 158 стр., М., 1958 (грамоты 84-136)
9. Новгородские грамоты на бересте (из раскопок 1955г.)
[А.В.Арциховский и В.И.Борковский], 152 стр., М., 1958
(грамоты 137-194)
10. Новгородские грамоты на бересте (из раскопок 1956-1957 гг.)
[А.В.Арциховский и В.И.Борковский], 328 стр., М., 1963
(грамоты 195-318)
11. Новгородские грамоты на бересте (из раскопок 1958-1961гг.)

- [А.В.Арциховский] , 118 стр., М., 1963 (грамоты 319-405)
12. Новгородские грамоты на бересте (из раскопок 1962-1976гг.)
[А.В.Арциховский и В.Л.Янин], 192 стр., М., 1978
(грамоты 406-539)
13. Палеографический и лингвистический анализ новгородских
берестяных грамот [Институт языкознания АН СССР], 215стр.,
М., 1955
14. 『樹皮に刻んだ古い文字』, ソ連出版文化通信, 33巻12号, 日ソ著作権センター, 東京,
1985, 11頁
15. Л.В.Черепнин, Новгородские берестяные грамоты как
исторический источник, 438 стр., М., 1969
16. В.Л.Янин, Я послал тебе бересту..., 192 стр., М., 1965

注

- (1) берестяные грамоты または грамоты на бересте と呼ばれる。
- (2) ただし, インク書きのもの2点(№13, №496)が含まれる。
- (3) 20語以下のものが大多数で, 20語を起えるものは約150点であり, しかもそのうち50語以上
のものは34点に過ぎない。
- (4) これらはすべてインクで書かれたものであるという〔16(27ff)〕。
- (5) 執筆者とその分担はつぎのとおり: Р.И.Аванесов (Введение, Фонетика),
Н.Б.Бахилева (Лексика), В.И.Борковский (Введение, Синтаксис),
Л.П.Жуковская (Палеография), П.С.Кузнецов (Морфология)。
責任編集者はボルコフスキイである。
- (6) В.И.Борковский, Лингвистические данные новгородских грамот
на бересте〔8(89-155)〕; Он же, Лингвистические данные новго-
родских грамот на бересте (из раскопок 1955г.)〔9(85-147)〕; Он
же, Лингвистические данные новгородских грамот на бересте (из

раскопок 1956-1957гг.) (10(169-322))。

- (7) メシチェルスキイのこの主張は、ノヴゴロド白樺木皮簡の言語をキエフ・ルーシの標準語から著しく逸脱した地方の無数養な住民の口語と見るヴィノグラドフらの見解に反対するものである — cf. В.В.Виноградов, Основные проблемы изучения образования и развития древнерусского литературного языка. Доклад на IV Международном съезде славистов в Москве в 1958г.
- (8) アルファベットの木皮簡の他の例としては完全なものは№199 (13世紀)だけで、これは37文字を含むが、**ф**, **а**, **ѡ**, **ѣ**はなく、**йотация**をあらわす字は**ю**だけである。木皮簡ではないが1954年に同じネレフスキイの発掘現場から文字手本と思われる36文字のアルファベットを刻んだ13世紀末ないし14世紀初の木片〔8(79-81)〕が発見されているが、その構成と順序は№199とはやや相違している。また14世紀初の木皮簡№342には字母による数字価の表示法を5桁まで示してあるが、これには**ф**, **а**, **ѡ**も含まれているのがわかる。
- (9) 「弱い位置」と「強い位置」の定義および**ѡ**, **ѣ**の推移の実例については、木村彰一「古代教会スラヴ語入門」白水社、1985, pp. 43-46を参照されたい。このように母音**ѡ**, **ѣ**の消失の傾向はすでに古教会スラヴ語の諸テキストにおいて認められ、それに極めて近い「オストロミール福音書」にも散発的な事例が見出される。母音**ѡ**, **ѣ**の推移はすべてのスラヴ語に生じたので、これは共通スラヴ語に胚胎したこの傾向が、分化した後のスラヴ語に継承されて進行を続け、ほぼ同時期に完了した音韻変化の過程であったと考えられる。
- (10) 以下における木皮簡テキスト点数表示にあたっては同一筆者によるものは1点として扱うものとする。
- (11) 以下の用字法のタイプに関する言及では**ѡ** - **е**の混同は殆どすべて**ѡ** - **о**の混同と同時に認められるので、特に重要な傾向と考えられるもののはかはそのタイプについて示さない。
- (12) ここの**Е**は音韻 /e/を表すもので、具体的な文字としては**е**のほか、**е** → **ѡ**の混同で生ずる**ѡ**の場合も含む。

補注 最近1977年-1983年発掘分のヤーニンとザリズニャクの名による報告書が刊行され、その総数は614点となった。